

<報告>

「信長貴富作品展 Part II」の報告

Report on the “Takatomi Nobunaga’s Work Exhibition Part II”

梅本 実

UMEMOTO Minoru

本稿は2019年7月22日に東京文化会館小ホールで開催した「～独唱と重唱で楽しむ～信長貴富作品展 Part II」の報告である。信長貴富氏は合唱の世界において国内で有数の人気を誇る作曲家であるが、今回の演奏会では彼の独唱曲、重唱曲に焦点を当てプログラムを構成した。独唱曲は、2018年7月に東京初演を行った《寺山修司の短歌による6つの歌曲「チエホフ祭」》と今回の演奏会が初演である《那珂太郎の詩による三つの歌曲》の2種の委嘱作品を中心に据えた。後半の《混声合唱によるうたの劇場「不完全な死体」》(2013年作曲)は意欲作であるにも関わらず、歌のソリスト集団による重唱に三味線、鍵盤ハーモニカが加わるといふ特殊な編成とその演奏の難しさから、まだ国内では数回しか上演されていない。近年合唱曲のみならず、独唱曲の創作にも力を入れ始めている信長氏の作曲家としての現在にスポットライトを当てた画期的な演奏会となった。

キーワード：信長貴富、寺山修司、歌曲、不完全な死体

1. 演奏会企画の意図と経緯

私はピアニストの立場からドイツ歌曲の演奏と研究を続けているが、近年日本歌曲のジャンルにもその活動の幅を広げている。一昨年(2018年)7月に合唱の世界において現在国内で有数の人気を誇る信長貴富(のぶながたかとも)氏の作品を集め「～独唱と重唱で楽しむ～信長貴富作品展」を開催した。このコンサートは、本研究の前段階に位置するものであるが、彼の独唱曲、重唱曲そしてピアノ独奏曲を選びプログラムを組み、作曲家「信長貴富」の姿を浮き彫りにした。以下にそのコンサートの概要を記す。なおピアノ独奏曲及び独唱曲、重唱曲のピアノは筆者が全て担当した。

～独唱と重唱で楽しむ～信長貴富作品展

2018年7月20日(金)19時開演

カワイ表参道コンサートサロンパウゼ

<出演>

ソプラノ：長島剛子・山崎法子

メゾ・ソプラノ：吉田信子・藤井奈生子

テノール：葛西健治・宮西一弘

バリトン：白岩貢：浅井隆仁

鍵盤ハーモニカ：村上藍

作曲・お話：信長貴富

ピアノ：梅本実

<プログラム>

I. 歌曲小品集

- ・うたうたう (詩：宮本益光)
- ・ある日 (詩：寺山修司)
- ・ほほえみ (詩：川崎洋)

独唱：吉田

- ・鬼ごっこ (詩：ゆきやなぎれい)
- ・しあわせよカタツムリにのって (詩：やなせたかし)
- ・きみ歌えよ (詩：谷川俊太郎)
- ・夕焼け (詩：高田敏子)

独唱：長島

II. こどものためのピアノ曲集「スタートダッシュ」より

- ・新しいスニーカー
- ・カシの木とハンモック
- ・マーマレードおばさんの大きな鍋

独奏：梅本

III. ゴンドラの唄 (詩：吉井勇 曲：中山晋平 編：信長貴富)

重唱：長島&吉田&白岩

IV. 寺山修司の短歌による6つの歌曲「チエホフ祭」
 <委嘱作品・東京初演>

1. 一粒の種
2. チエホフ祭
3. 父の墓標
4. 無名の詩
5. 海青き日
6. 巨大なる声

独唱：白岩

V. アンサンブルで聴く寺山修司詩集

- ・ぼくが死んでも
- ・歌うためには
- ・歌曲
- ・不完全な死体
- ・ヒスイ

重唱：長島、山崎、吉田、藤井、
 葛西、宮西、白岩、浅井
 鍵盤ハーモニカ：村上

アンコール

- ・一本の鉛筆（詩：松山善三 作曲：佐藤勝 編曲：
 信長貴富）

前半は、彼の独楽曲の中から比較的親しみやすい作品7曲をメゾ・ソプラノとソプラノの歌唱で始め、《こどものためのピアノ曲集「スタートダッシュ」》より3曲、そして三重唱による編曲作品〈ゴンドラの唄〉といった構成であった。

後半は寺山修司のテキストによる作品でまとめ、バリトン独唱による《寺山修司の短歌による6つの歌曲「チエホフ祭」》と全員のアンサンブルによる重唱作品5曲を演奏した。

《チエホフ祭》は2017年12月に青森で初演された委嘱作品であり、本公演が2回目の演奏で東京初演となった。そして全員のアンサンブルで演奏した5曲のうち真ん中の3曲は、2013年に東京室内歌劇場からの委嘱で10人の声楽アンサンブルのために作曲された《混声合唱によるうたの劇場「不完全な死体」》の抜粋であった。全6曲から成るこの作品は歌のソリスト集団による重唱に三味線、鍵盤ハーモニカが加わるといふ特殊な編成とその演奏の難しさから、まだ国内では数回しか上演されていない。この時は三味線が入る第1曲と第6曲を割愛し、鍵盤ハーモニカが入る第2曲

を含む3曲を演奏した。

この演奏会の反響は予想よりもはるかに大きく、更に大きな会場での作品展と《不完全な死体》の全曲演奏への気運が高まった。そこで1年後の今回同じメンバーに、三味線を加え「信長貴富作品展 Part II」を行うことを決めた。三味線は初演以来全ての公演に参加している本條秀慈郎氏に依頼した。また今回の演奏会のために新作歌曲を信長氏に委嘱することにした。

2. 演奏会の概要

～独唱と重唱で楽しむ～信長貴富作品展 Part II

2019年7月22日（月）19時開演

東京文化会館小ホール

<出演>

ソプラノ：長島剛子・山崎法子

メゾ・ソプラノ：吉田信子・藤井奈生子

テノール：葛西健治・宮西一弘

バリトン：白岩貢・浅井隆仁

鍵盤ハーモニカ：村上藍

三味線：本條秀慈郎

作曲・お話：信長貴富

ピアノ：梅本実

<プログラム>

I. 歌曲小品集

- ・うたうたう （詩：宮本益光）
- ・ある日 （詩：寺山修司）
- ・ほほえみ （詩：川崎洋）

独唱：吉田

信長氏との対談1（インタビュアーは筆者）

II. 寺山修司の短歌による6つの歌曲「チエホフ祭」

<委嘱作品・再演>

1. 一粒の種
2. チエホフ祭
3. 父の墓標
4. 無名の詩
5. 海青き日
6. 巨大なる声

独唱：白岩

III. 那珂太郎の詩による三つの歌曲 <委嘱作品・初演>

1. うた

2. 作品 B
3. 飛び翔る影

独唱：長島

～休憩～

信長氏との対談 2

IV. 混声合唱によるうたの劇場「不完全な死体」 (寺山修司)

1. 書物の私生児 (1972「寺山修司詩集」より)
2. 歌うためには (1973 散文詩集「棺桶島を記述する試み」最終章より)
3. 毛皮のマリー・抄 (1967 戯曲「毛皮のマリー」マリーのセリフより)
4. 歌曲 (1970 映画「トマトケチャップ皇帝」より)
5. 不完全な死体 (制作年不明 「毒薬物語」より)
6. <終曲>流れ星・流れ星 (1975「疾病流行記」より)
重唱：長島、山崎、吉田、藤井、
葛西、宮西、白岩、浅井
鍵盤ハーモニカ：村上
三味線：本條
ピアノ：梅本

アンコール

- ・ほくが死んでも (詩：寺山修司)
- ・一本の鉛筆 (詩：松山善三 作曲：佐藤勝 編曲：
信長貴富)

3. 演奏会当夜の報告

前半は3人の独唱者による歌曲の演奏で、まず信長歌曲のうち既に出版され、比較的良く知られている3曲〈うたうたう〉〈ある日〉〈ほほえみ〉をメゾ・ソプラノの吉田信子氏と演奏した。作曲者による短い解説によると、〈うたうたう〉はバリトン宮本益光の書き下ろし詩によるソング(初演2012年9月27日)で、原曲は同年1月に初演された女声二部合唱曲である。〈ある日〉は寺山修司の詩によるが、郷愁の中の孤独をセピア色の子守唄が包み込む(初演2005年3月15日)。原曲は《無伴奏混声合唱のための「カウボーイ・ポップ」》(2004年5月4日初演)第4曲である。〈ほほえみ〉はユーモアと、少しの毒と、愛。比喩を重ねて着地点へ落とし込む川崎洋の手法が光る詩(初演2007年1月

24日)により、2001年に初演された混声合唱曲が原曲である。

演奏の後、作曲家の信長貴富氏にご登壇頂き、次に演奏する二つの委嘱作品についてインタビューを行い、それぞれの歌曲集の作曲された経緯、詩の選択、曲集への想いを語ってもらった。

インタビューに続き、《寺山修司の短歌による6つの歌曲「チエホフ祭」》をバリトンの白岩貢氏と演奏した。テキストとなった「チエホフ祭」は1954年の雑誌『短歌研究』の特薦に選ばれ、弱冠18歳の大学生であった寺山修司が歌壇の注目を集めるきっかけとなったものである。「青い種子は太陽のなかにある」という短歌集のタイトルに添えられた一文そのままに、直感に訴える瑞々しいポエジーであり、青春期の苦悶を含みつつ力強い意志が感じられる。信長氏はこの「チエホフ祭」の中から19首を選び、内容の近い短歌を組み合わせて6曲の歌曲として構成したが、定型短詩を用いることにより、自由詩では不可能な有節形式の試みや、歌としての整ったフォルムを求めたようだ。また前述の「青い種子は…」の一文を、寺山の謎めいた魅力を象徴する言葉として第4曲〈無名の詩〉の最後に用いている。若き寺山の才能の輝きに見事に反応したこの歌曲集は、2017年に寺山ゆかりの地青森で初演(バリトン：白岩貢、ピアノ：相馬直子)された後、昨年7月に東京で再演され(バリトン：白岩、ピアノ：筆者)、今回は3度目の演奏となった。青森在住であり委嘱を依頼した白岩氏のこの作品への深い共感、そしてエネルギー溢れる熱唱が印象的だったとの感想があった。

次に《那珂太郎の詩による三つの歌曲》〈うた〉(作品B)〈飛び翔る影〉をソプラノの長島剛子氏と演奏した。この作品は今回の演奏会のために委嘱した新作であるが、信長氏はインタビューの中で「演奏会プログラムを構成する段階から関わったこともあり、前半3つの歌曲のステージに多様性を持たせることを考慮した。」と述べている。つまり最初に合唱曲から編曲された大変親しみやすい3曲のステージから始め、次に比較的整った形式と寺山修司のテキストがもたらすある種のわかりやすさを持つ《チエホフ祭》を据え、最後に最も現代的な那珂太郎の3曲が続くという構成にしたわけである。信長氏は更にインタビューの中で、「一般に平易な作品が歓迎される傾向がある中、あえて少しそこから距離を置き、ドライな抒情の世界を表現してみた」という趣旨のことを強調していたが、那珂太郎の実験的な詩に付曲した今回の作品は、信長歌

曲の新しい地平を切り開くものになったのではないだろうか。「さ さ さ さく さくさくさく さくら さくら・・・」と始まる第1曲〈うた〉は日本語の音声そのものに着目し、「響き」という物理的な側面が「意味」の色彩を帯びるところに、単なる言葉遊びに終わらない情緒を生み出している。現代美術をも想起させるような手法は斬新であり、聴衆からは多くの反響を頂くことが出来た委嘱初演となった。

後半は、《混声合唱によるうたの劇場「不完全な死体」》を演奏した。この作品は前述のように東京室内歌劇場の10人の声楽アンサンブルで初演されたが、今回は8人のアンサンブル（各パート2名ずつ）で行った。この作品に関して信長氏は「ソリストの集団であることを生かすために、歌手の個性が見える場面を配し、起伏に富んだ作品にすることを目標にして構成を練った。初演年が寺山修司の没後30年に当たることもあって、寺山作品に照準を絞り、個を際立たせるに相応しいテキストを求めることにした。結果として詩のみならず戯曲のセリフや劇中歌に至るまでの範囲に目を向けることになった。一見雑多に見えるテキストの選択・構成だが種々の断片を集めることで多面体である寺山修司の一個の肖像が立ち現れるのではないかと目論んだ。曲集のタイトル「不完全な死体」は、「寺山修司の肖像」を言い換えたものと思っていたら幸いである。」とプログラム・ノートの中で述べている。信長氏は第5回奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門第1位（1998年）を寺山修司の《9つの俳句による歌曲集「わが高校時代の犯罪」》で受賞して以来、彼のテキストによる作品を折に触れ書いている。今回取り上げた〈ある日〉〈ぼくが死んでも〉や〈ヒスイ〉等よく知られているものも多い。寺山は47年の生涯に短歌、俳句、詩のみならず、小説、脚本、演劇、映画、評論等々膨大な量の文芸作品を発表し「言葉の錬金術師」とも評されたが、その多彩な才能を浮き彫りにしたこの《不完全な死体》はまさに信長氏による寺山作品の集大成と言えるのではないだろうか。

2018年7月にこのメンバーで初めて演奏した時は、三味線の入っていない3曲のみを取り上げた。今回は全曲演奏という事で、国内外で活躍している三味線の本條秀慈郎氏に出演を依頼した。この曲の初演から全ての公演に参加している彼は、さすがにこの曲を熟知しており、練習の際に多くの示唆をもらうことが出来た。例えば歌手に要求される邦楽的な「語り」の部分に関して、楽譜には作曲者による簡単な演奏上のコメ

ント以外の事は書かれていない。西洋音楽の演奏法に慣れている今回の演奏者たちにとっては何分未知の世界であった。本條氏から間の取り方、語り方等実際に手本を示してもらい、それを歌手たちが真似をするということを何度か繰り返し、少しずつ作曲家の求めていたイメージに近づくことができたようである。

400人を越える多くの聴衆からの拍手に応え、アンコールは〈ぼくが死んでも〉〈一本の鉛筆〉の2曲を演奏した。近年合唱曲のみならず、独唱曲の創作にも力を入れ始めている信長貴富氏の作曲家としての現在にスポットライトを当てる画期的な演奏会になったのではないかと思う。

謝辞：この演奏会は2019年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）の助成を受けた。ここに心からの感謝を申し上げる。

資料：

「～独唱と重唱で楽しむ～信長貴富作品展」2018年7月20日（金）19時開演（カワイ表参道コンサートサロンパウゼ）のプログラム・ノート（解説：信長貴富）

「～独唱と重唱で楽しむ～信長貴富作品展 Part II」2019年7月22日（月）19時開演（東京文化会館小ホール）のプログラム・ノート及びインタビュー（解説・お話し：信長貴富）